神戸新聞 夕刊 2026年6月24日

日銀神戸

支店長の視点

別所昌樹氏

兵庫の清酒、乾杯！

お酒が好きかと問われれば、人並みには嗜（たしな）むとお答えすることにしています。実際、米国とドイツではワイン、英国ではスコッチやクラフトジンと赴任地ごとの一杯を楽しんできました。そして、当地では何といっても清酒です。この2年間、休日に兵庫五国を歩く中、多くの酒蔵を訪れる機会に恵まれました。灘五郷はもちろん、伊丹、播磨、但馬、丹波、淡路の伝統ある酒蔵の個性豊かな清酒に魅了されました。

国税庁の調査（令和6酒造年度＝7月～翌年6月）によると、兵庫県の清酒製造数量は全都道府県1位。全国の27％を占めます。同年度中に清酒を製造した酒蔵は56場あり、新潟、長野に次ぐ3位です。代表的な酒米「山田錦」は約6割が兵庫産です。

一方、清酒醸造業を取り巻く環境には厳しさもあります。アルコール離れや生活様式の変化で清酒の国内向け出荷は兵庫でも減ってきています。エネルギーや瓶等の副資材の価格上昇に加え、一昨年来の主食米価格上昇は酒米の調達や価格にも影響しています。

もっとも、心強い変化もあります。高級化と国際化です。県内の特定名称酒（純米酒、純米吟醸酒、吟醸酒、本醸造酒）の製造数量は、２０２４年は増加に転じました。数年前には約30億円だった輸出売り上げも、約40億円となりました。売り上げ全体の1割弱です。関係者の方々のご努力のたまものです。

ところで、ジューンブライドの今月は、日銀では定例異動の季節です。門出の祝いや惜別に欠かせない「乾杯」ですが、その場にはぜひ兵庫の清酒を添えたいものです。長渕剛さんの名曲の一節「君に幸せあれ！」という言葉を心の中で唱えながら。